

## 「特別講演-1」

### iPS 細胞を用いる細胞治療の現状と展望

京都大学 iPS 細胞研究所 基盤技術研究部門

木村貴文

induced pluripotent stem cell (iPS 細胞)は、多能性幹細胞の特性を利した新たな細胞治療を創生するための臨床用リソースとして期待できることから、その基礎研究から臨床応用に至るまでを資金とシステムの両側面から強く推進してきました。

その成果もあり、平成 26 年 9 月には理化学研究所の高橋政代プロジェクトリーダーらによって世界発となる iPS 細胞を用いた細胞治療が実施され、この時に自己 iPS 細胞由来網膜色素上皮の移植を受けた患者の経過は良好です。平成 23～24 年度の再生医療実現化ハイウェイでの採択課題（10 課題）のうち 5 課題が iPS 細胞を用いるものですが、それらに必要な移植細胞リソースである医療用 iPS 細胞ストックは iPS 細胞研究所（CiRA）において拡充がはかられており、iPS 細胞を用いるハイウェイ課題のいくつかはここ一両年で実施可能なところまでたどり着くものと期待されています。

とはいえ、コストのかかる研究的医療をささえる社会全体のしくみや海外での細胞治療の動向なども見極めながら、新たな細胞治療を、先進医療を経て保険医療として定着させるための長期的な戦略が求められましょう。本講ではこのような問題を提起させていただきながら、iPS 細胞を用いる細胞治療の将来展望についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。